

洞爺湖サミットにむけて～泡瀬干潟を守れ～

前川盛治・泡瀬干潟を守る連絡会事務局長

地球温暖化問題を主要な議題とする洞爺湖サミットが日本を議長国として7月に開催されません。

地球温暖化抑止は、一刻の猶予も許されない人類的課題になっています。国連の「気候変動に関する政府間パネル」(IPCC)は、「人類が排出してきた温暖化ガスの濃度の上昇が、気候変動の原因であることは、ほぼ確実である」「気候変動の速さと規模によっては、突然のあるいは非可逆的現象が引き起こされる危険性がある」と報告しています。また、同報告は、世界の平均気温が2度(産業革命以前に比較して)上昇すると、取り返しのつかない重大な変化が起ると予測しています。

地球温暖化抑制はまさに全人類の喫緊の大きな課題になっています。

それに対する日本の取り組みはどうなっているのでしょうか。端的に言えば、先進国の中でも決定的に立ち遅れています。京都議定書での約束(1970年比で温室効果ガス6%削減)も守らず、逆に6.2%も増やしている状況です。サミットの議長国としてまさに恥ずべき状況です。温暖化防止のために我が国の政策の抜本的転換が求められています。

日本国は、温暖化ガスの排出抑制でも決定的な遅れを取っていると同時に、炭酸ガス吸収で大きな役割りを果たしている森林、サンゴ礁や海草藻場の破壊という点でも多くの問題を抱えています。

ここ沖縄県では、沖縄県北部で、米軍の辺野古新基地建設でのサンゴ礁・海草藻場破壊や東村高江での米軍ヘリパッド建設での森林破壊の問題が起っています。沖縄県沖縄市の東部に広がる泡瀬干潟では、187haの干潟・浅海域を埋立てる問題があります。

泡瀬干潟埋立は、ホウヒトケヤクやザンナシなど新種・貴重種が続々発見され、豊かな海草藻場やサンゴ礁が広がる貴重な場所が、隣接する新港地区のFTZの港の浚渫土砂の捨て場として埋められること、また、埋立地が海洋リゾート地として構想されているが、その実現性が無いのに工事が進行しているなど大きな問題があります。これまで一期工事区域の護岸が完成し、いよいよ今年度の12月から新港地区の浚渫土砂が投入され、新種・貴重種・絶滅危惧種の生息場所、海草藻場・サンゴ礁が生埋めにされます。

今年国際サンゴ礁年で、地球温暖化をテーマに日本国が議長国として洞爺湖サミットが開かれる年であるのに、一方では、地球温暖化防止に大きな役割りを果たしている海草藻場やサンゴ礁が生埋めにされる状況です。埋立地の近傍で将来航路として浚渫される場所にはヒマツドリイ群落もあり、そこは昨年・今年と2年に亘ってサンゴ産卵が確認され、中城湾のサンゴ供給の場所として貴重な役割りを果たしていることが明らかになっています。このような場所が、航路として浚渫されたり、生埋めにされるのです。こんなことが許されていいのでしょうか。サンゴに関して補足すれば、近年沖縄近海では白化現象でサンゴ礁が危機的な状況にあります。沖縄本島西海岸や八重山の石西礁湖では白化現象でサンゴが死滅した場所に移植によってサンゴ礁を復活させる努力が行われています。一方で、沖縄本島近海でヒマツドリイやスキナツドリイ群落として発達している場所泡瀬干潟が生埋めにされるのです。

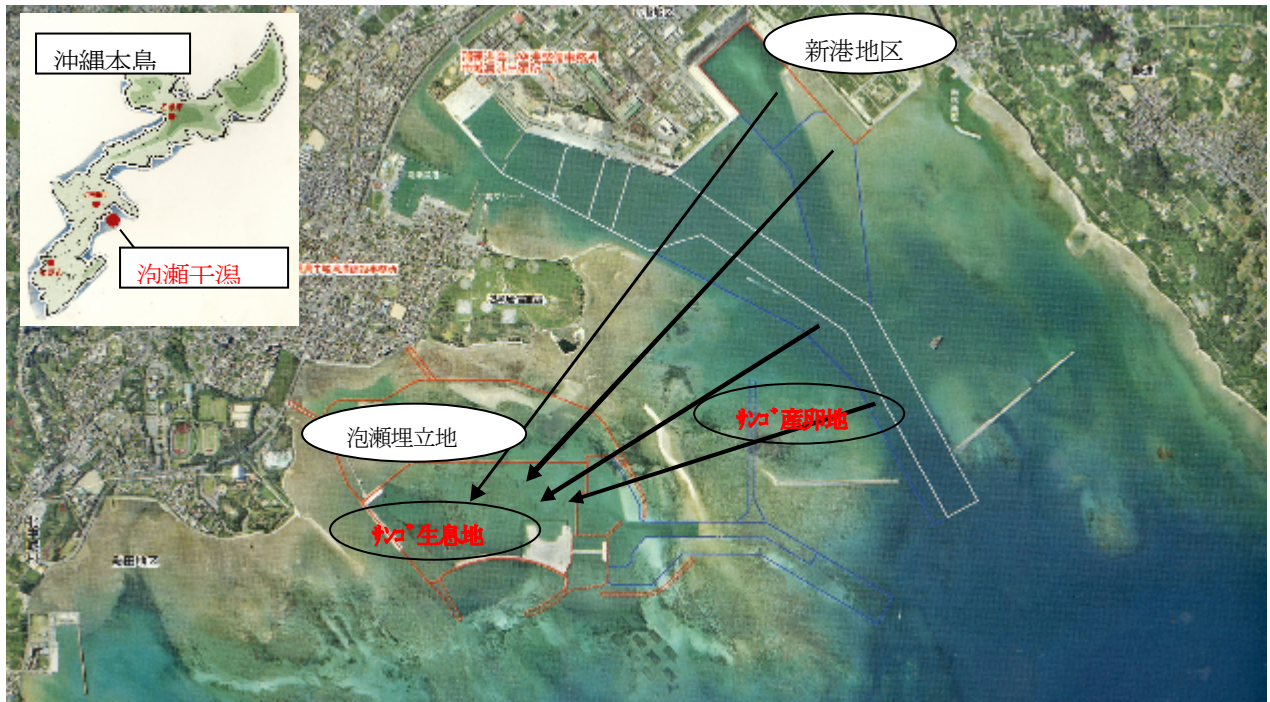
この事業を行っているのは国(内閣府沖縄総合事務局)と沖縄県(土木建築部港湾課)です。

サンゴや海草藻場を保全する立場にあるはずの環境省も、内閣府の事業であるとして、見てみぬ振りです。

地球温暖化をテーマにしたのサミットを機会にして、自然保護・環境保全の立場の行政が行われることを切に要望したいところです。

資料 泡瀬干潟と浅海 埋立計画はどんなもの？

泡瀬干潟・海域埋立事業は、沖縄市の東にひろがる干潟・海域 187ha を埋立てる事業。下図（事業者資料）の線で囲まれた「泡瀬埋立地」。下が第一期工事区域(96ha)、上が第二期工事区域(91ha)、現在第一期工事が進行し 07 年度工事で第一期工事区域護岸が完成した。08 年度以降、図の上のうるま市新港地区・FTZ（泡瀬埋立地から約 4km 離れている）の港・航路の浚渫土砂がポンプ 浚渫・パイプ 輸送等で運ばれ埋立てられる（矢印が浚渫土砂運搬ルート）



この埋立は、沖縄市の強い要請で、国（総合事務局）・沖縄県の事業として進められ、完了後、国から沖縄県が購入し、その約半分 90ha を沖縄市が買取り、「海洋リゾート地」造りに活用される予定。事業の目的は、新港地区の港・航路の浚渫土砂処分場を造る事（国の目的）、埋立地を活用して「海洋リゾート地」を造る事（沖縄市・県の目的）であるが、目的は破綻。

問題点

1. 新港地区 FTZ 構想の失敗・破綻。FTZ 用地は僅か 6.9% の分譲率。ホテルなど海洋リゾート地造りの実現性がない。市民・県民に大きな負担を押し付ける。
2. アセスが杜撰である。（ケレミドリ移植・海草移植失敗、貝類・鳥類等生息する種の調査極めて不十分） 一期工事区域はサンゴ生息地であるのに、浚渫土砂で生埋め（08 年度工事）。トゲバネの繁殖期（4～7 月）の工事着工の暴挙。世界の宝、生物多様性の宝庫、ラムサール条約登録予定地が失われる。
3. 埋立着工後も新種・貴重種・絶滅危惧種が数多く発見されているが、保全がなされず、生埋め。
4. 沖縄県包括外部監査人も、需要予測が甘い、計画も抽象的として、事業の抜本的な見直しを提言。
5. 東門市長は、07 年 12 月に「一期容認、二期困難、一期工事区域の事業見直しを 2～3 年かけて行う」と発表。現時点で事業計画はない。一期工事を中断して事業見直しをするのが当然。



一期工事区域内のスキナミドリイシ



一期工事区域内のリュウキュウキツカサゴ



西防波堤隣のヒメマツドリイシの産卵